

オリーブの会通信

مجموعة الزيتون

2023年4月20日第29号 (通巻35号)

オリーブの会

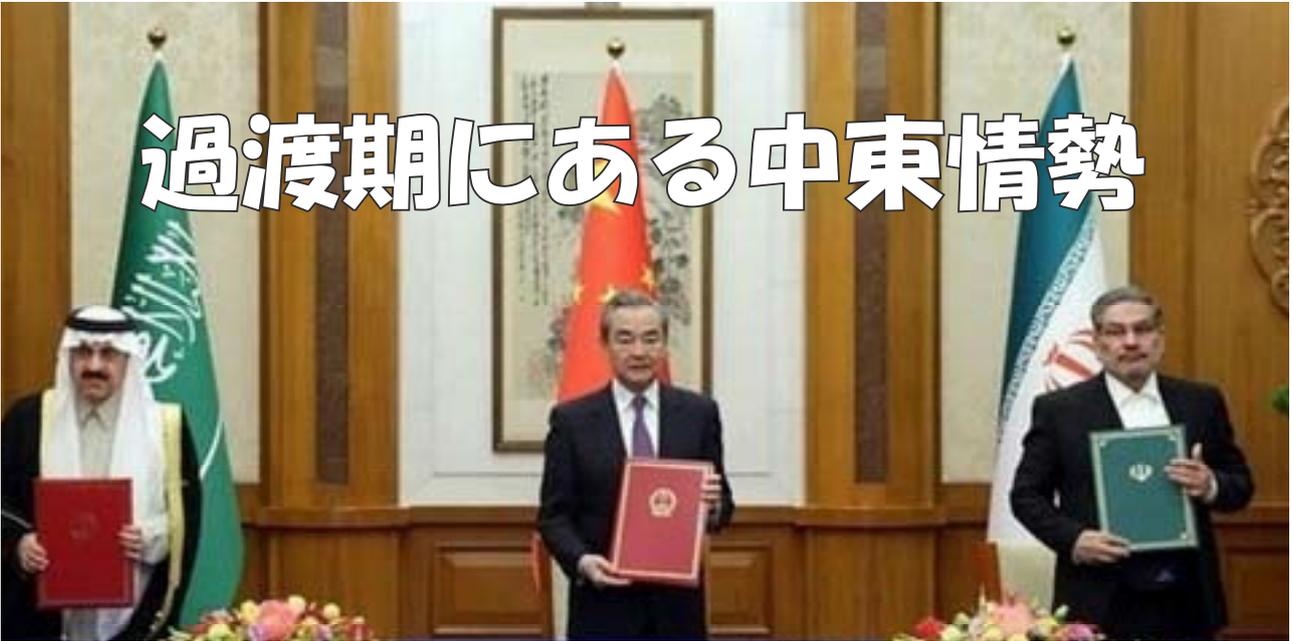
大阪府豊能郡能勢町平通101-453

tel/fax:072-737-9454

mail: olivenokai_zeytun@yahoo.co.jp

facebook:oribunokai

過渡期にある中東情勢



中東における政治構造が変わる可能性が出てきています。これまでのアメリカ、イスラエルの思い通りに再編されてきた中東が、変わろうとしています。その最も大きなものは、これまで敵対関係にあったイランとサウジアラビアの和解です。それがどこまで続くのかという疑問を呈する向きもありますが、イランとサウジアラビアとの対立関係が緩和されれば、対イランでアラブ諸国とイスラエルの同盟を画策している米国の戦略は大きく狂うこととなります。そこで、中国の役割が大きいように見えます。中国は東アジアではその覇権主義をむき出しにして、よいことは行っていないが、中東では、ソ連なき後空白であったパワーバランスが復活をさせています。

サウジアラビアは和解を通して、イランとの関係やテロ組織との関係問うことで、敵対していたカタールとも関係を改善し、また、シリア内戦で、対立していたアサド政権との関係改善を図っています。また、パレスチナとも、自治政府だけでなく、対立していたハマスとの話し合いをも行っています。サウジアラビアの動きは、この地域での対立構造を解決することで、中東の自立性を回復しようとしているように見えます。また、中東におけるサウジアラビアの位置を高めようとしていると思わ

れます。それは、米国の言いなりではなく、自立した立場で中東での政治を行う方向にあると思われる。

サウジのアメリカ離れ、中国との関係強化

アメリカとサウジアラビアとの関係は、トルコでのカシゴ暗殺で、サウジアラビアのサルマン王子が関与を米国が指摘したことで、関係が悪化しました。人権問題をかかげる民主党バイデン政権がどのような態度をとるのが注目されていましたが、昨年、バイデンは、イスラエル訪問の後に、サウジアラビアを訪問し、米国が石油価格の引き下げのために増産をサウジアラビアに要求しましたが、その要求を拒否し、石油の減産を行いました。サウジアラビア、他の産油国にとっても、石油の価格をあげることがそれぞれの国の利益となっており、米国の要求を受け入れませんでした。

そして、非常に対照的だったのが、その後サウジアラビアを訪問した習近平国家主席への大歓迎でした。その中国がサウジアラビアとイランの和解の仲介を行いました。どこまで、両国での合意が進んでいるのかは、わかりませんが、外交関係を回復したことには、大きな意味があります。それとその仲介が中国によるものであることにも意味があります。

また、イランも経済制裁を受けて、経済的には困難な状況にあり、協調する方向に進んだと思われる。中国の

存在は、イラン、サウジアラビアにとって、米国の言いなりにならないためのバランス・パワーとしてあります。中国自身も、米国に変わって、中東での覇権を拡大できます。

イスラエルの「アブラハム合意」の前提が崩れる可能性

イスラエルの外相は、サウジアラビアとの正常化はテーブルの上にあるとして、イランとサウジアラビアの和解への影響は受けないという立場をとっています。しかし、イスラエルは、イランを中東最大の脅威ととらえて、反イランの立場をとるアラブ諸国との同盟関係を作ってきました。サウジアラビアもイランと対立してきたが、パレスチナ問題などをあげて、正常化にはすすんではいません。UAEなどの湾岸諸国は、対イランだけでなく、イスラエルとの関係での経済的利益を考えており、簡単に「アブラハム合意」にのったと思われず。

イスラエルは、サウジアラビアとも正常化すすめようとしていましたが、イスラエルと敵対するイランとの関係改善をしたことは、その正常化の目的をつぶされることとなりました。

サウジアラビアの変化は、イスラエルとの国交の正常化よりも、イランとの国交正常化の道を選びました。このままイランとの関係はうまくいかないと指摘する声もありますが、イランとだけでなく、カタール、シリア、パレスチナのハマスなどとの和解を行っており、これは、対イランというだけでなく、サウジアラビア自身が中東の安定をつかむために、アメリカ、イスラエルと中国、

イランとのバランスをとっている可能性があります。

パレスチナへの影響

この動きは、パレスチナにとっては、歓迎すべきものではありません。トランプ政権による「アブラハム合意」の推進は、パレスチナを非常に困難な状態においてきました。加えて、ネタニヤフ新政権の極右シオニスト性格が強まり、パレスチナとの和平の否定どころか、パレスチナの存在そのものを否定するものが、新政権の閣僚を構成し、彼らのもとで、入植者たちの暴力、土地の占拠、パレスチナ住民に対する継続的な嫌がらせなど、非常に困難な状況に置かれています。アラブ連盟などは、このイスラエルの暴挙に抗議はするが、それに対して、実効的にパレスチナを防衛することはできていない。アメリカも和平の仲介者であることをすでにやめており、パレスチナは、孤立した状態におかれていました。

イランとサウジアラビアの和解は、パレスチナに希望を与えるものになっています。そして、中国の存在は、アメリカ、イスラエルとの対峙のバランス・パワーになります。

また、可能性としては、イランの支援を受けていたハマスとサウジアラビアなど支持を受けていた自治政府との和解の可能性も生まれてくるかもしれません。

いずれにしろ中東の地政学の地図は大きく塗り替わることになるかもしれません。



投稿日時：2023年04月06日 | 10:37 (PFLPのHPより)

アブアリ・ハッサン

サウジとイランの紛争のルーツを探ると、政治的な意味では、1979年にイラン革命が勝利し、湾岸警察官であった当時の皇帝シャー・ムハンマド・レザ・パフラヴィーが倒されたことで発生した古い紛争であることがわかります。この紛争は、その事件と影響が40年半以上にわたって拡大した。そして、鋭い、あるいは穏やかなラウンドとコンテクストを経て、その中で論争的な出来事や発展が起り、これらの相違を深め、その時間を長引かせま

した...

この争いの本質は、もともと両国の「政治的経験」に基づくものであり、イデオロギー的な要件（シーア派－スンニ派）に基づくものではありませんでした。政治の世界には存在しなかったが、しかし、政治的な争いは過去を問い、それを召喚し、争いの中で政治の側と同義になるようにした。同様に、政治におけるイデオロギー武器の使用は、かえって紛争を煽り、地域におけるその領域を深化・拡大し、千四百年続いてきた紛争を復活させ

ることに貢献しています。この政治的紛争は、歴史的な争いを再燃させ、その後、無数の戦争や紛争を引き起こし、地域を疲弊させました。その影響と反響に今も苦しんでおり、地域の敵がその国家や社会・政治構造を再編する道を与えました…。

イラン・イスラム革命以前は、この地域に「シーア派国家」は存在せず、むしろ湾岸・非湾岸のスニ派国家の中にシーア派が存在し、イラン・イスラム革命の勝利によりシーア派国家が思想的に出現しました…。

この地域におけるシーア派国家の成立という歴史的変化に照らして、不安と懸念が始まり、イスラム世界の指導権をめぐる対立と競争の方程式が浮かび上がり、紛争はその最悪で最も危険な政治形態に姿を現し、(シーア派とスニ派の) 紛争、その形成と道筋というあの歴史時代についてのベールが再び明らかになったのです…!!

イラク・イラン戦争は、この競争と不安の本質の反映にすぎず、それがかえって相違を深め、アラブ地域を分裂させた。サウジアラビアと湾岸諸国は、イランとの戦争でイラクを支持し、その他の国は中立に立っていましたが、一連の出来事を通じて事態はエスカレートし始めました。

1987年に過激派イスラムグループがグランドモスクを襲撃して、その背後にイランの存在があると非難するなど、紛争の継続と値踏みに寄与した出来事。1987年のハッジの季節にイラン人巡礼者のデモが行われ、警察とデモ隊の間で衝突が起こり、イラン人巡礼者とサウジ警察の(412)人の命が奪われました。2011年、バーレーンでシーア派の反対デモが起こり、その結果、サウジアラビア軍はシーア派革命から政権を守るためにバーレーンに動き、入国しました。革命の輸出という論理でこの事件の背後にイランがいると非難し、紛争はさらにエスカレートし、問題はその境界にとどまりませんでした。サウジアラビアは、サウジアラビアのシーア派反体制派47人を処刑した。その指導者は、サウジアラビアでシーア派から広く支持されていたニムル・アル・ニムルで、この問題はさらに政治レベルでエスカレートし、その結果、イランのデモがテヘランのサウジアラビア大使館を囲んで起こり、その建物に火がつけられ、サウジアラビアはイラン国家と外交・商業関係を絶つにいたりしました…

イエメン危機が勃発すると、双方は危機を利用して影

響力と存在感を高めることに徹し、サウジは湾岸諸国などと同盟してイエメン戦争を開始しました。それへの対応として、イランはこの不当な戦争に直面したフーシ革命を支援しました。イエメンという地域は、諸権力が増殖し、サウジアラビアが目的を達成できないまま、戦争が続いています。この戦争の中で、紅海で一連の事件が起こり、湾岸やサウジアラビアの船舶や一部の施設に影響が出ました。これは、地域を疲弊させ、そこに外国人が入りやすくする危機が続いていました…。

サウジアラビアとイランの政治的対立の根源となったもので、最近のイランとサウジの合意は、この対立を止め、両者の外交関係回復の可能性を告げるものであり、地域とその人々の利益につながると期待をされています…

協定とその国際的次元

これらの紛争や戦争の後に何が起こったのか、そしてこの吉報、これだけの歴史的差異の回復の動機と理由は何なのか……？イスラム意識や国民意識を怒らせたこの深い歴史的な違いを克服することは可能なのだろうか…？

これらの茨の道にある問いに答えられるのは、政治とその義務と法律だけです。政治は(利害としての)イデオロギーの頑固さを知らず、立場の停滞を知らず、むしろその利害を達成する可能性を知っています…。

これが、この地域の国同士の関係を正常な状態に戻すために、両当事者が実現した新しい政治的方程式です…。頑固さや確固たる立場は、急激な変化や発展には耐えられません。そのため、政治は考えて工夫をこらうなら、頭をひねり、地域や国際的な変化に対応することになります。

この合意は、イラクとオマーンでの5回の交渉が先行したように、その瞬間の結果ではなかったことは間違いないが、その完了はいくつかの要因の結果でした。

第一に この合意は、大きく老朽化したグローバル・システムの構造になお深く影響を及ぼしている国際的な変化から切り離されたものではありません。世界のすべての国々は、既存の紛争掲示板の中で自分たちの位置を探し、対立する国々との距離を見極めなければならなり

オリープの会通信 第29号(通巻35号)

ません。世界は、政治、経済、その他のすべてのレベルで構造的な危機を抱えたこの戦争の影響を受けて生きており、この結果、形成が始まった新しい世界の地図に弱い国や不在の国、コンパスを決められない国の居場所はありません。...

この地球規模の紛争とその政治的、経済的、商業的な現れ(エネルギーはその一例)と貿易は、当然、イランとサウジ諸国を、軍事的ではなく、政治的、経済的、商業的に、既存の紛争ボードに適切にポジショニングする場所を探し、それぞれが列強との「共通の利益」に必要な距離を決定させる。地球規模の紛争で、両者はその利益が新しい地球時代を迎えるために違いを解決しなければならぬと理解しましたが...

そして、中国がこの合意を達成するために、積極的に成功し、影響力のある調停者の役割を果たすとき、それは新しい世界秩序に直面する新興のグローバルパワーとしての価値を証明し、この地域と中東に存在し、誰もそれを孤立させたりブロックしたりできないことを証明する...

また、中東や地域の多くの国々を中心に展開するこの地域での政治的・中心的な地位を求めており、2013年から開始した世界最大のプロジェクトである「一帯一路」プロジェクトの完成を勝ち取るためには、互換性があり同盟的な環境が必要だとも考えています。アジアとヨーロッパ、アフリカを結び、世界最大の貿易ルートを実現し、中国を世界第一の大国にするもので、サウジアラビアとイランはこの地域の中心国で、影響力と金融・投資能力を持っているので、中国が彼らに将来の役割にネットの関心を持つのは自然なことである、一帯構想に加え、一路は「このプロジェクトがこれらの国々の支持を得て成立するためには、地域の国々の安定が必要であり、したがって、中国の役割は、仲介者ではなく、ビジョンと戦略的役割であり、中国の最高の利益を見るものです。...

第二：2016年以来サウジアラビアがイエメンに対して行った戦争は、爆撃機やミサイルなどのあらゆる軍事兵器にもかかわらず、フーシ派に対する信頼できる勝利につながらず、時間の経過とともに、政治、軍事、安全保障、財政の負担となり、これ以上負担することができません。加えて、この戦争から実質的に離れたアラブ連合国、一方では国際社会がこれを無視し、ちょうどサウジとイエメンの精力と能力の無駄になったのと同じです。このよ

うな現場の結果、サウジ政権はこの戦争は無駄であり、志したものを達成することはできないという結論に至ったのです。数日以内に解決できると妄信していた頃も含めて...

逆に、その進路と結果によって、サウジアラビアは危険と不安の二乗に置かれ、戦争方程式のプレーヤーであるイランとの合意や、中国の支援による国際的な色合いを持つ合意によって、面目を保ちつつこの戦争から離れることを考えざるを得なくなりました。一方では、体制も強化されています。サウジアラビアの施設がフーシのミサイル攻撃を受けても支援に介入しなかったことから、米国はすべてを与えてくれる信頼できる同盟国ではないと確信し、戦略的同盟国が必要であるとの危惧と確信を深めることに貢献しました、しかし、サウジアラビアの説明や政策とは異なる説明をしています。アメリカ人は、サウジアラビアへのアメリカの忠誠は絶対であり、どんな状況でも保証されるという前提で行動するようになっており、忠誠さえ保証されていれば、アメリカがサウジの要求にすべて応じる必要はないのです。...

アメリカとの関係や歴史的な依存関係からくるこうした確信が、サウジアラビアに、アメリカとの関係を支配する「戦略」を損なうことなく、ロシアや中国との関係を作るという点で、計算された限定的な対米関係の破壊を促すことになりました...

これが、サウジアラビアに中国の仲介を受け入れさせ、イランとの正常な関係に戻るための合意を完了させたものです。このことが、イランをこの地域における最初の敵であり、いかなる場合にもその包囲網を解いてはならないと考えるアメリカを動揺させます...

第3に、サウジアラビアのレバノン政策は、ある集団を犠牲にして別の集団を支援し、自らをレバノンのスンニ派の保護者と位置づけ、レバノン内政の決定要因としてきたにもかかわらず、失敗したことは言うまでもありません。レバノンにおけるこの圧倒的な存在感は、すべてその基盤を作るものではありません。影響力のある人々、積極的で決断力のある政治エリートはいないが、レバノンの台頭を妨害するプロジェクトに過ぎなかったのです。この失敗をきっかけに、サウジはレバノンでの収支を計算し直し、再びカードを並べるようになった。レバノンでの躍進は、そこにいるもう一人のプレーヤー、つまりイラン抜きにはありえません...

これが、サウジアラビアに計算を再考させ、この地域での役割を見直さざるを得ないイランとの関係回復を受け入れさせた理由でした...

この合意を受けて、アナリスト、政治家、メディア関係者の間では、答えを求める質問が相次いでいる。この合意が実行され、両国の国交が回復するという証拠はあるのか？

多くのアナリストは、この合意は両国間、そしてこの地域の国々で政治的、国民的に受け入れられると主張する傾向がある。レバノンとイエメンでは、アラブ世界におけるシリアへの開放、合意されたレバノン大統領選出への道筋、レバノンの経済・金融危機を緩和するサウジ湾の開放、イエメンの独立主権国家への復帰につながるイエメンとイエメンの利益の実現、あるいは現在進行中の戦争の始まりを終わらせる政治方式の模索...

レバノン、イエメン、シリアのこれらの危機は非常に複雑で、その解決は極めて困難かつ複雑であることは間違いないが、イランとサウジアラビアの関係修復は、短期的に根本的な解決はなくても、これらの危機とその複雑さの解決に一定程度寄与するだろう。

この合意に立ち向かうための障害は、その実施に際して、また実施されたとしてもその成熟の前に置かれることは当然のことであり、私たちも注意しなければならないことである。

同様に、この合意に影響を受ける政治的、党派的な政党があり、彼らの様々なメディア武器、特に、両国間の和解を拒否する彼らの毒と立場を放送し続けている扇動



サウジアラビアとイランとの合意を受けて、イエメンのフーティ派の捕虜交換が行われた

衛星チャンネルを使用するでしょう...

そして、この合意が実施に移されれば、政治的、経済的、商業的に複数のレベルでアラブとイランの関係回復のための扉が大きく開かれ、この地域が比較的穏やかな時期に入る道が開かれるだろうが、イランのほぼ固定した立場からの急激な変化にはつながらないだろう。また、サウジアラビアも、イランが米国に対して立場を変える過程にあるわけではなく、イランに対する継続的な敵対姿勢と数十年にわたる包囲網が、立場を変えることに何ら寄与しないからである。同じように、シオニストエンティティ（イスラエル）は依然として、最初の危険と挑戦はイラン国家とその核計画を進展させようとするその努力、そして抵抗軸を強化する上での重要な役割であると考えており、したがって、この合意はシオニストエンティティに何の変化ももたらさない。また、抵抗の枢軸または特にヒズボラから、彼らは地域でそれらを通して動くイランの政治的および野戦力を構成するため、これらの立場は政治的、戦略的、イデオロギ的、特にパレスチナ問題に関する立場、変更の余地はありません...

同様に、シリアとの同盟関係についても、イランの立場を変更する可能性はありません。イランの地政学的思考は、国交回復という単なる合意のためにシリアの舞台を犠牲にすることはありません...

同じことが言える。サウジアラビアはイランに対する立場を完全にを変えることはなく、イランの影響力に対する危機感や絶え間ない危惧を持つが、特に紅海とアラビア湾の安全保障を必要とする湾岸地域において、この危険を軽減するためにイランとの関係をできる限り回復しようとするのだろう。





ベン＝グヴィール軍団と 今後のレジスタンスとの対決

投稿日時：2023年04月02日 | 11:22 (PFLPのHPより)

イスラエル軍の元退役准将で「国家安全保障研究所」の研究者であるメイル・エルラン (Meir Erlan) 氏は、3月31日の記事で、ベンヤミン・ネタニヤフ政権の国内治安大臣であるイタマル・ベン＝グヴィール (Itamar Ben Gvir) 氏が現在準備を進めている「国家警備隊」が設立されることを確認しています。ベン＝グヴィール氏自身が指揮を執り、警察や陸軍の司令部から独立した部隊として任務を定義しています。

Yedioth Ahronoth 紙が昨年3月29日に明らかにしたところによると、ベン＝グヴィールはこれらの部隊のために150万シェケル以上の初期予算を要求し、これまでに国境警備隊と軍から提供された戦闘経験のある1800人以上の戦闘員と将校を準備した。この部隊は、武器や弾薬を入植地の住宅に保管し、あらゆる場所に持ち運んで武力作戦を抑制し、反乱やデモの形態に立ち向かうもので、特に1948年以来占領されている領土内でユダヤ人とパレスチナ人が混在する都市で、またはヨルダン川西岸の入植地を保護するために結成されます。

ベン＝グヴィールは、2年前の5月にガザ地区でレジスタンスが発動した「サイフ・アル・クッズ (エルサレムの剣)」作戦で、占領軍がガザ地区に発動した「壁の番人」作戦に対して、ロッド市などのパレスチナ人が列をなしてガザ地区を支援した経験に基づいて、この任務を設定した。その際、ロッドのパレスチナ人は、イスラエル警察を障壁、不服従、武器で包囲し、近隣からの撤退を強要した。

アクレ、ハイファ、ヤッファ、ネゲブ、ラムラなど、1948年以降占領されたパレスチナの都市には、ユダヤ人とパレスチナ人がさまざまな割合で含まれていることが注目されます。占領軍やイスラエル警察は、エルサレムやガザ地区で軍事作戦を行う際に、これらの都市について説明するようになった。「これらの都市や入植地付近での軍事的任務、そしてそれとはかけ離れた、これらの都市や入植地を守る上で頼りにならない警察部隊の役割。

元イスラエル警察署長モシェ・カラディは、ベン＝グヴィールが自分の部隊に「カハナ・ヘイ」組織や同様の武装入植者グループからボランティアを選び、彼らの作戦結果を隠蔽するために自分の指揮下に置いたことを明らかにし、これこそ警察や国境警備隊の勤務体系と矛盾するものであり、カラディもベン＝グヴィールがこれを求めていると認めている。“これらの武装ユダヤ人民兵の作戦と現場での支配を正当化するためである”。

ベン＝グヴィールと彼の党は、占領警察が公に責任を負えないこれらのグループに、ベン＝グヴィールの部隊がパレスチナ人に対して公に虐殺を行い、対峙で起こったのと同様に彼らの家を燃やすことができるような権限を与えたいようです。そして、このようにして起こったことは、武装したパレスチナ人に対する入植者の自衛のための民間人同士の戦争の結果であると主張することになる。彼は、治安大臣でなかったときも、占領軍と警察によって強化された「国家治安部隊」の名において武装した入植者の指揮官となった今も、常にそうした対立を呼びかけてきました。

Yedioth Ahronoth 紙によると、ベン＝グヴィールは、ヨルダン川西岸地区内の任務のために、これらの入植者の特別部隊を「党員部隊」という名称で設立したという。パレスチナ人を恐怖に陥れ、退去させるための虐殺という形で、「防衛」を意味する「ハガナ」の名を冠したベン・グリオンBen-Gurionの正式な軍隊は、それを止めることを避けた。なぜなら、彼は当時、これらの民兵すべてを自分の軍隊に含めることを認識しており、これが1948年の戦争後の彼の行動でした。

しかし、ベン＝グヴィールは、虐殺を行うことによってパレスチナ人を恐怖に陥れ、強制追放しようとする自分の計画が、目的を達成できないことに気づいていません。なぜなら、パレスチナの抵抗勢力とその同盟国が、デイル・ヤシンの虐殺などの時には存在しなかった、抵抗軸の勢力や政党が武器、装備、戦闘員をもって包括的に支援して、現在あらゆる形で存在している力をもってこれに対峙するからです。



イスラエルは民兵国家に変貌するのか？

投稿日：2023年4月12日 | 10:47 (PFLPのHPより)

マヘル・アルシャリフ博士 (Dr. Maher Al-Sharif)

宗教シオニスト党首で財務大臣兼「治安省」大臣であるベザレル・スモトリッチが、占領地ヨルダン川西岸で過激派入植者からなる非正規民兵を統制し、パレスチナ人の町「フワラ」を燃やして一掃しようと公に呼びかけたが、撤回した。この点、同僚の宗教シオニスト「ユダヤ勢力」党首で「国家治安」大臣のイタマル・ベン＝グビルは、「国家警備隊」の名のもと正規民兵を保有するとした。3月27日、イスラエルのベンヤミン・ネタニヤフ首相は、イタマル・ベン＝グヴィール氏とクネセトに6人の代表を持つ同党が司法改革の承認を1カ月延期することに合意する見返りに、「国家警備隊」の結成を開始することに文書で合意しました。世論調査では、ベンヤミン・ネタニヤフ首相の政治状況は危険をはらんでおり、この期間に新たな立法選挙が実施された場合、同連立政権は失脚する可能性が高いとされていた。

政府は「国家警備隊」の編成と資金調達を承認した。

ベンヤミン・ネタニヤフ政権は4月2日に開かれた会議で、イタマル・ベン＝グヴィール治安相が率いる「国家警備隊」結成のプロジェクトにゴーサインを出した。もう一人がこの警備隊を指揮し、90日以内にその活動範囲を決定する予定です。草案では、この国家警備隊は全国に配備される「正規軍と専門戦術旅団」で構成されると規定されています。一方、政府は同会議で、約10億シェケルかかるこの警備隊の編成に資金を提供し、そのために各省の予算を大幅に削減し、各省が「1.5%の予算削減を受けなければならない」ことを承認しました。この決定は、超正統派政党シャスのヤーコフ・マルジ社会福祉大臣を含む複数の大臣を怒らせました。

イタマル・ベン＝グヴィールは正規の民兵をどう想定しているのか？

イタマル・ベン＝グヴィール大臣が過激派入植者であることは知られている。彼は若い頃、暴力や憎悪を煽つ

たとして何十回も告発され、2007年にはテロ集団の支援と人種差別の扇動で有罪判決を受けている。2021年5月、パレスチナ人が歴史的パレスチナの全土を席卷し、その際にガザ地区を中心に260人のパレスチナ人と兵士を含む14人のイスラエル人が殺害され、イスラエルの国家・宗教右派が恐怖を感じたことをきっかけに、「国家警備隊」結成のアイデアが生まれました。彼は、1948年領土のパレスチナ人とヨルダン川西岸とガザ地区のパレスチナ人の連帯運動がひとつであり、軍が国境に軍を動員せざるを得ない場合に備えて、「ホームフロント」の安全を確保するための特別警備隊の結成を検討しています。

イタマル・ベン＝グヴィールの事務所は、「国家警備隊」の結成を承認した後に声明を発表し、その中で、この警備隊は「同省の監督の下で活動し、イスラエル人の安全を回復する」と述べ、その任務は「国家緊急事態と国家犯罪（攻撃。彼によればユダヤ人への攻撃）とテロに対処する」ことになると考え、政府資金により「当初は国家警備隊の1850人の隊員の採用を許可するが、準備ができるまでには数ヶ月かかる」ことを指摘しました [2]。しかし、ベン・グヴィールはもっと大きな野心を持っており、約2,000人の隊員で形成され、占領下のヨルダン川西岸に展開する軍隊である国境警備隊の大部分を、その数を倍増して「国家警備隊」に統合し、1万人のボランティアを加えることができると熱望しています。

イスラエル・ハヨム紙とのインタビューで、ベン＝グヴィール氏は、イスラエル警察は「国家的犯罪に対処する方法を知らない」と強調した。「混合都市でアラブ人がユダヤ人に対して行った暴動の際、警察は国家的犯罪に対処する能力もアイデアもなかった」とし、「通りを行き交うアラブ人の悪に苦しむユダヤ人」を守ることができないからである；すべてのアラブ人ではなく、パレスチナ国家樹立の権利のために戦い、ここイスラエルに住む私たちの権利を抹殺しようとするアラブ人である。“そのため、「警察本部長ではなく、政府そのものに所属する」「国家警備隊」が設置され、その活動は「警察が慣れ親しんだものとは異なる」ことになる [3]。

パレスチナ人がさらされる危険がエスカレートしている

イタマル・ベン＝グヴィールの正規の民兵組織は、特にパレスチナ人を脅かすものとして、パレスチナ人の間に大きな恐怖を与えているというのが、多くのアナリストやオブザーバーの意見です。ベン＝グヴィールは、1948年地域のパレスチナ市民が自分たちに対する政府の差別的な措置に直面したり、占領地の同胞の闘いに連帯を表明したときに、彼らを標的にすることで「秩序の維持に専念する」直属の準軍事部隊を設立したいと常々考えています。

一方、このような力は、占領地ヨルダン川西岸のパレスチナ人を標的とした弾圧を強めるために使われることになる。これは、欧州パレスチナ・コミュニケーション・フォーラム（欧州フォーラム）の人権擁護者で広報担当のロバート・アンドリュースが予測したことで、「カハニスト大臣イタマル・ベン＝グヴィールの私的民兵を与える」と見ている。過去に有罪判決を受けたベン＝グヴィールの民兵は、占領地全体のパレスチナ人の安全にとって歴史的な後退を意味することになりそうだ」と述べ、「パレスチナ人に対する暴力やテロ行為を続けることが予想されるが、彼らは制服を着用し、公式に国家機関の一部を構成している」と推定している。と、Middle East Eye への発言で付け加えています：

国家警備隊」計画に対するイスラエル人の強い批判

イスラエルでは、「国家警備隊」の編成案が、ベンヤミン・ネタニヤフ連立政権に反対する政治家、治安指導者、政治アナリスト、人権協会などから強い批判を呼んでいます。

イエシ・アティド（Yesh Atid）党の党首で野党指導者のヤイル・ラピド（Yair Lapid）は、政府が「国家警備隊」を創設するという「馬鹿げた、卑劣な」計画を非難し、これに関して4月2日（日）に下した決定を批判し、次のように述べた：「政府は保健、教育、社会扶助、公共交通、防衛予算を削減し、すべてTikTok ピエロの凶悪犯の私兵に資金を提供することになる。」

前公安大臣のオメル・バー・レフ氏は、ツイッターのつぶやきでこう書いている：「理解力のなさで我々を困らせ、テロ集団の支援と人種差別の扇動で有罪になっ

た大臣が私設民兵を訓練するという信念は衝撃的だ。」イスラエルの警察署長であるコビ・シャブタイは、イタマル・ベン＝グヴィール宛の5ページにわたる書簡でこのプロジェクトに疑念を表明し、その中で特に、「この兵が独立し、警察階層と無関係であれば、公共の安全を損ない、法執行の混乱を招く恐れがある」と強調、この警備隊の結成は、「有形利益のない余分で無駄な構造を作り出す公金の浪費に他ならない」と推測しています。

2004年から2007年にかけての元警察署長であるモシェ・カラディは、ベンヤミン・ネタニヤフ首相に対し、ベン＝グヴィールに「この権限を与えることに警戒せよ」と呼びかけ、「いつか彼に不利に働くかもしれない」と付け加え、ネタニヤフは「歴史から学ぶべきだ。政治家が自分の軍隊を持っている国で何が起きているかを見るべきだ」。彼はTVチャンネル12のインタビューで、司法改革プロジェクトに抗議するデモ隊が道路を閉鎖し、ベン＝グヴィール大臣が「革命軍」を派遣して力づくで道路を開けようと急ぐことで、「警察署長と治安大臣に従属する二つの警察の衝突が起こる」危険があると想像しました。なお、ベン＝グヴィールは国家安全保障大臣としての立場で介入した。

シン・ベトのロネン・バー長官も、非公開の会合で、国家警備隊の結成に反対する意向を示していた。政府の法律顧問であるガリ・バーラヴ＝マヤラも、現行版の「国家警備隊」結成草案の前には「法的障害」があると考え、警察は「競合する機関に奉仕しなくてもその責任を果たすことができる」とした [5]。

したがって、問題はこうなる：「イスラエルは民兵国家になるのか」。正当な質問である。有力な政治家が運営する正規・非正規の民兵の存在を考えれば、そもそもパレスチナ人を攻撃するだけでなく、ユダヤ人市民をも脅かすことになり、一部の政治家やアナリストが恐れるように、彼らの存在が国の権力の座を完全に奪おうとする「クーデター」を起こす危険性も排除できません。

[1] <https://fr.timesofisrael.com/les-ministres-acceptent-des-coups-budgetaires-pour-creer-la-garde-nationale-de-ben-gvir/> ; <https://www.france24.com/fr/moyen-orient/20230402-en-isra%C3%A9l-le-gouvernement-approuve-la-formation-d-une-garde-nationale>

[2] https://www.lemonde.fr/international/article/2023/04/01/en-israel-itamar-ben-gvir-faconne-une-garde-nationale-a-sa-main_6167868_3210.html

[3] <https://infos-israel.news/itamar-ben-gvir-la-police-a-des-limites-cest-la-raison-de-la-creation-de-la-garde-nationale-protoger-les-juifs-des-arabes/>

[4] <https://www.middleeasteye.net/fr/decryptages/israel-garde-nationale-milice-privée-ben-gvir-menace-palestiniens-securite>

[5] <https://fr.timesofisrael.com/ex-chef-de-la-police-ben-gvir-pourrait-utiliser-la-garde-nationale-a-mauvais-escient>

<https://digitalprojects.palestine-studies.org/sites/default/files/3-4-2023.pdf>



投稿日時：2023年04月06日 | 10:37 (PFLPのHPより)

東部地域の政治・安全保障状況は、重要かつ有望な突破口を目撃しているが、西部地域では逆に、特にレバノン、レバント、パレスチナにおいて、危機と緊張の増大に向けて前進していることがわかる。

中国の支援によるサウジ・湾岸関係とイランとのデタント。このデタントは、その冷静なスタイルと柔らかい指先によって、一方では紛争を和らげデタントを達成し、他方ではアメリカの「イスラエル」のその火を扇いで燃えさかり続けさせるプロジェクトの効果を取り除き、誰も達成できないことを成し遂げた。これは冷徹に反映された。そして、イエメンでの戦争の道筋の平和（比較的今のところ）。マスカット会談はそれなりに進展しており、獄中者・捕虜の交換について合意の気配がある。これは、後に深い理解の地平への扉を開く最初の一步である。ロシアがこの方向性を押し進めることに貢献し、その後、中国がコミュニケーションラインに入った。数日前、サウジアラビアと和解し、イエメンのアンサー・アラアラーの同盟国であるイランが、イラン（カナニ）報道官の発言によると、危機を終わらせる独自のプロジェクトを持っていると発表した。モスクワ、北京、テヘランはいずれも、オマーンの調停者の能力を信頼し、その役割を高く評価しており、誰も彼に取って代わろうとは思っていない。彼らは皆、自分たちの調停とイニシアチブを通じて、オマーンの支持という役割を完成させたいと考えている。

米政権は遅まきながらテヘランに封鎖の一部解除を提案するオファーを送ったが、条件が緩和されたイランは、米国のオファーに無関心で応じている。イスラエルはイランが核を保有している、あるいは短期間に保有するという口実で、イランとの対決の火を焚いたが、（イスラエルは）政治の決定要因に気づいているので、イランとの対決には、バイデン政権が望まないアメリカの直接的役割が必要であり、湾岸の関与も必要で、どちらも用意されていない。

しかし「イスラエル」は、ロシアが取り組んでいるシリアとトルコの和解への道を塞ぐことに関心があるため、複数の目標を達成したい北東戦線から始めて、エスカレートすることしかできません。このファイルでは限定的ではあるが、近い将来の彼の最も困難な選挙戦に備えて和解を維持するというエルドアンの緊急の必要性に助けられて進歩を遂げており、「イスラエル」はワシントンと湾岸を直接対決に引きずり出すことができない限り、イランとの摩擦に関心を持っており、レバントに対するイスラエルの攻撃はエスカレートし、民間および軍事のイランとシリアの標的を攻撃し、その役割を完了するためにヤルムーク キャンプで暗殺を実行し、北部の al-Jolani and Hayat Tahrir al-Sham 存在を告げる爆破を行った。

治安当局によるヘブライ語の報道では、イランとヒズボラがレバントから新たな戦いを仕掛けており、パレスチナに拠点と活動拠点があり、最近の攻撃はこの戦いの一部であるとするものもあるが、ダマスカスとテヘランは、適切な時と場所での対応ができない、また、レジスタンスの大衆が要求しているこの毒物を輸入しないためにイスラエルはこの方法で危機を輸出しているということとはできる。

第二のエスカレートポイントは、占領地であるヨルダン川西岸です。ユダヤ教の過越祭は、昨日水曜日からは始まり、数日間続く。政府の閣僚に支持された過激派タルムード入植者政党は、アル・アクサ・モスクへの新しい種類の侵入を準備している。彼らは、特にエルサレム市民とパレスチナ人一般の感情を刺激し、供物の虐殺につながる前例のない復活祭の儀式を実施している。テルアビブからのニュースによると、イードにおけるユダヤ人のアル・アクサ・モスクへの入場に関する了解は、ヨルダン政府とパレスチナ自治政府の承認のもとに締結されたとのことですが、アンマンとラマツラはこれを否定しており、今後数日間の驚きによって明らかになることでしょう。

もう一つの深刻な問題では、（イスラエル）政府は、ベン・グヴィール国家安全保障相が、治安を実現し入植

者を保護するため、そして実際にはパレスチナ人を殺害し彼らの生活を耐え難い地獄にするために、西岸に特殊軍を設立するプロジェクトを承認した。こうした統制の弱さにもかかわらず、入植者や過激派を構成員とする民兵組織であり、刑事責任を問われたユダヤ人囚人に対して、この民兵組織での勤務によって刑期を置き換えるインセンティブを与える合意があると噂され、政府は閣僚

の反対にもかかわらず、全省の予算から1・5%を削減してこの民兵組織の財源にすることを承認した。イスラエル軍が、当局のエリアAを含むヨルダン川西岸のあらゆる場所に昼夜を問わず侵入し、殺害や取り壊しが日常茶飯事になっている中でのことである。

戦争は、無防備なパレスチナの人々と占領軍の間に、



投稿日:2023年04月03日 | 14時35分(PFLPのHPより)

ワディ・ハダドは普通のリーダーではなかったし、普通のステージで登場したわけでもない。アブ・ハニは、パレスチナの人々とその国家的大義にとって最も中心的な瞬間に最も重要な指紋を残したのです。どのような場でも大声で議論すれば、一種の狂気と見なされたであろうワディの行為は、全世界に「私はパレスチナ人である」と挑戦することに貢献しました。私は存在するのだ」と。しかし、おとなしい彼は、革命家が「現実的」であることを要求されず、損得勘定にとらわれることもないことに早くから気づいていた。革命家には戦略的な目標がある。それはパレスチナであり、その川から海までのパレスチナのすべてであり、そこに到達するためには、音を立てなければならない。世界はパレスチナの名の下にあり、この占領が世界の自然な構成要素に変わる機会を得られないことは、これが緊急占領的で殺人的な存在であるためであり、それにもその支持者や同盟者にも、どこにも一分の安心と快適さを楽しむことはない。

ワディ・ハダド率いる「パレスチナ解放人民戦線」の「アウトサイド」攻撃は、「特殊作戦」の分類の中で、最も質的な作戦の中で歴史にその位置を確保した安全性の質と優れた専門性に加えて、同時に、過激な作戦をプラットフォームに変えて、大使を通じてパレスチナの声を全世界に伝えるという人間的価値をも担っています、人民戦線」は、彼らのパスポートに切手とパレスチナの印

章を貼り、パレスチナの名を彼らの国に伝える。この攻撃は、世界の集団意識を標的とし、パレスチナの大義を担う革命家の本質を全世界に反映した。彼らは、自分の意識と政治姿勢を銃口とコンパスに乗せてパレスチナに伝える革命家であるということだ。

ワディ・ハダドの創造性、そして限りない大胆さは、私たちパレスチナの人々が必要としていた魔法の公式であり、ジョージ・ハバシュの政治的・革命的精神性、そして「フロント」が発表した堅実で一貫した原則的理論性を完全に補完するものだった。

ワディ・ハダドは、世界の革命家にとって魅力的で最適な投資要素を形成することに成功し、彼の名前「ブランド」は、この機能不全の力と基準の不正な世界で自分の足跡を残そうとする夢見る革命家にとって最も目立つ魅力を構成するものだった。この「アウトサイド」は、成功した多くの国籍の革命家たちの羅針盤となった。ガッサン・カナファニは、パレスチナの大義の重要性で彼らを動員し、それを自分たちの中心的大義と考え、その理念と「人民戦線」の理念のために犠牲を払った。日本の「赤軍」、ドイツの「赤軍」、イランのムザファル、ベネズエラのカルロス、ニカラグアのパトリック・アルゲーロ、国籍の異なる多くの名前が、ワディとアル＝ハキムの指導の下、その思想の実現に命と人生を捧げた。

「アウトサイド」の先駆者、あらゆる場所で敵を迫害す

るチャンピオン、そして多くの人が毒矢を向けて批判しようとした闘争形態の所有者の出発から45年以上経った今日、最も重要な歴史的な問題が生じている：パレスチナ革命は、この騒動がなければ、すべての国際的な場に届いたのだろうか？何百人もの人々をそれぞれの国でパレスチナ人民とその大義の大使にすることなく、世界中の「人民戦線」の外野の活動によって何がもたらされたのだろうか。

特に、シオニストの犯罪行為がエスカレートし、世界中のあらゆる場所で、私たちパレスチナ人の過激派や支持者を、暗殺や誘拐、あるいは受け入れ国での強制送還や拘留を目的とした組織的な標的として躊躇なく狙っている中で、パレスチナ人のすべての勢力は対外活動の哲学を再考すべきではないだろうか。この挑戦は、現在の世界的な展開の現実から導き出された異なる戦術や方法とはいえ、外部行動には外部行動で立ち向かうという責任の前に抵抗勢力を置くものではないだろうか？

この問いは、ワディとその仲間たちが行った作戦そのものに立ち戻ることを要求しているのではない。むしろ必要なのは、国境を知らず、不可能は存在しないと信じるワディ・ハダドの創造的な思考法への回帰であり、不

パレスチナ日誌

1月13日

- ・カバティアでのイスラエルの侵略による死者は2人となった。
- ・ジャラズンキャンプへの襲撃で、青年が負傷し、他が逮捕された。
- ・占領軍は、ジャルクモスの2人の釈放された獄中者を逮捕し、彼らの車を押収した。
- ・占領軍はツバスの北部、アカバの青年を逮捕した。
- ・キサンの村で、入植者たちは、家と車を攻撃した。
- ・ヘブロンで、ジャベール地区の青年を占領軍が逮捕した。
- ・占領軍は、エルサレム市民に自宅を自分で取り壊すように強制した。
- ・占領軍は、ツクの町の北の入り口を閉鎖した。
- ・ Beit・ウマルの衝突で、占領軍の銃弾で4人の青年が負傷し、数十人が呼吸困難となった。
- ・カフル・カッドムの行進の弾圧で、3人が銃弾で負傷し、数十人が呼吸困難となった。
- ・アルビレの北の入り口で占領軍の銃弾による青年が負傷した。
- ・ジャラズンキャンプの襲撃で、青年が負傷し、他が逮捕された。
- ・占領軍はジャルクモスの2人の元獄中者を逮捕し、彼らの車を押収した。
- ・サラフィの西で、入植者たちが65本のオリーブの苗を根こそぎにした。
- ・ Beit・ウマルで、占領軍の銃弾で青年が負傷した。

可能は困難であるが可能であるためである。これは、パレスチナのレジスタンスの指導者が、関与の輪と輪を拡大し、あらゆる場所で占領を追求することに貢献する行動の方法とツールを導き出す際に、その思考に制限を設けないことを必要とします。この敵は、占領下のパレスチナ国内だけでなく、世界中のあらゆる場所で、その利益を深刻に脅かす力という言葉を理解するだけです。むしろ、それは、対決の均衡において、周辺の国々における私たちの民族の難民とその同盟国の積極的な役割を回復するための継続的な闘争の始まりである。

その行為、勇気、大胆さ、不動の姿勢によって不滅となった指導者、ワディ・ハダドの記憶の中で、私たちは、思考においてより革命的になり、提案においてより大胆になり、実行においてより強くなり、敵の行動のあらゆる場において敵と対峙し、手本となること、そして占領軍が追求の方程式を開始したことを知らせることを呼びかける。抵抗のシンボルを、世界のどこでも標的とすれば、応酬し、世界のどこでも抵抗は復権されるだろう。敵がその犯罪性に立ち向かう抑止力とレッドラインを見出さないなら、敵は躊躇なくわれわれの国民とその抵抗者の血を流すだろう。

・入植者たちは、ジェリコの北で青年たちを攻撃した。

1月14日

- ・占領軍は、ナブルスの近くで、ジェニンの青年を逮捕した。
- ・占領軍に銃撃され、アルヤモウンの青年が死亡
- ・ジェニンの南、ジャバへの入り口で、占領軍の銃撃で、2人が負傷。
- ・ハーン・ユニスで、占領軍が催涙ガス弾で呼吸困難者。
- ・カルキリヤ近くで、占領軍の実弾で2人の青年が負傷した。

1月15日

- ・マサフィール・ヤッタでの反入植地の行進を占領軍が弾圧した。
- ・占領軍は、アルアロウブの市民の複数の家に銃撃した。
- ・占領軍は、軍事検問所で、ジェニンの青年を逮捕した。

1月16日

- ・ラマラの北で、刺殺攻撃を行おうとしたという容疑で、占領軍に青年が撃たれ、逮捕された。
- ・ナブルス：入植者たちがハワラの食料を盗む。
- ・ヨルダン渓谷：入植者たちが、キリベト・アルファリシヤの土地をフェンスで囲んだ。
- ・ヨルダン渓谷で、手りゅう弾の爆発で、イスラエル兵一人が死亡、3人が負傷した。
- ・シリワドで、占領軍の銃弾で市民が殺され、彼の息子が負傷した。
- ・エルサレムのファタハの書記が喚問され取り調べられた。
- ・カルキリヤの東で、入植者によるひき逃げで、子供が負傷した。

1月17日

- ・占領軍は、ヒズマで15の施設をとりこわした。
- ・西岸での逮捕キャンペーン。対峙と衝突が引き起こされている。

オリーブの会通信 第29号(通巻35号)

占領軍は、エルサレムから2人の少年を逮捕。

- ・アルムガイルの近くで、入植者たちが、市民の車を攻撃している。
- ・占領自治体はベイト-ファファの町の建設中のビルを取り壊した。
- ・諸党派は、占領軍との衝突のエスカレートを呼びかけた。
- ・アルイサウイヤの3人の少年が逮捕された。
- ・占領軍は、シリア国境で5人を逮捕した。
- ・アルハデールで占領軍との衝突で負傷者
- ・占領当局は、イタリア人の連帯活動家を追放した。

1月18日

- ・占領軍はナブルスの東部地域を急襲し、負傷者がでた。
- ・占領軍はツバスの北で2人の青年を逮捕した。
- ・入植者たちが、ナブルスのヨセフの墓を急襲、青年が負傷し、逮捕された。
- ・占領警察は、エルサレムの2人の少年を逮捕した。

1月19日

- ・ヤッタの東のカシム・アルカルム小学校の取り壊しの停止求める請願は否決された。
- ・パレスチナは、安保理にイスラエルの一方的な措置に対峙するように呼び掛けた。
- ・ジェニンキャンプで、占領軍の銃撃で2人の殉教者。
- ・占領軍は、西岸で9人の市民を逮捕した。
- ・ジェニンキャンプの人々は、2人の殉教者、ジャバリンとバワクナを追悼した。
- ・作戦を行おうと計画していた容疑で、2人がネタニヤで逮捕
- ・占領当局は、エルサレム市民に自宅を取り壊すことを強制した。
- ・占領軍は、ベイト・ウマルで市民を逮捕。

1月20日

- ・イスラエル軍は、ガザでの警戒のレベルを上げた。
- ・ザバド村への占領軍の侵攻で、呼吸困難者
- ・国連は、イスラエルにパレスチナ人の教育権を保証するように呼び掛けた。
- ・シリワンで5人の子供が逮捕された。
- ・ダマスカス門で、入植者たちが行進をし、エルサレム市民が追いつ出された
- ・ベングビールの反対にも関わらず、占領警察、新しい入植地の前哨地を撤去した。
- ・占領軍は、青年を逮捕し、5人のエルサレムの少年を釈放した。
- ・占領自治体は、エルサレム旧市街の自宅を取り壊すようにエルサレム市民を強制した。
- ・イスラエル警察は、まヘル・ユニスの家の周辺に展開した。
- ・イスラエル警察は、戦士はマヘル・ユニスの祝賀へのファタの代表団を攻撃した
- ・アルハデールの町で、衝突で占領軍の銃弾で2人が負傷した。
- ・カフル・カッドムで占領軍の銃弾で5人が負傷し、数十人が呼吸困難となった。
- ・占領軍は、マサフェールヤッタでの植樹イベント弾圧。
- ・占領軍は、エルサレムの活動家ムハマッド・アブアルフムスを逮捕した。
- ・ファタハは、ジェニンで4人の殉教者の追悼フェスティバルを組織した。
- ・入植者たちはベツレヘムで、25本のオリーブの苗を根こそぎに

1月21日

- ・エルサレムの北の入植地で、女性の入植者が、銃弾で割れたガラ

スの破片で負傷。

- ・シリワン：占領自治体がアルクンバー一家に彼らの家を自分たちで取り壊すように強制した。
- ・ラマラ近くで入植者の銃撃で殉教。
- ・シュファトキャンプで、別々の衝突が起こった。
- ・ネタニヤフ政府に反対するデモがテルアビブ・ハイファ、エルサレムで12万5千人で行われた。
- ・釈放された獄中者マヘル・ユニスが召喚され、尋問された。
- ・エチオン近くの軍事検問所に銃撃、容疑者は逮捕された。
- ・占領軍はツバスの青年を逮捕した。

1月22日

- ・占領軍は、ジェニンの南に軍事検問所を設置した。
- ・入植者たちが、シリワンを急襲した。
- ・スモトリッチの党の閣僚が閣議をボイコット
- ・エルサレムで作戦の実行を計画した容疑で子供が逮捕された。
- ・占領当局は、アルタス村の2つの部屋を取り壊した。
- ・パレスチナは、スウェーデンで過激派がコーランを燃やしたことを非難
- ・トルカラムの南で、検問所で2人の兄弟を逮捕した。
- ・イスラエル特殊部隊がデヘイシャキャンプで青年を逮捕した。
- ・占領軍は、複数のエルサレム市民を逮捕し、他の人々の拘束を延長した。
- ・ヘブライ語の情報で、キリヤトアルバ入植地に銃撃があった。
- ・入植者たちが攻撃したあと、占領軍は、活動家ムハマッド・アブアルフムスを逮捕した。
- ・入植者たちは、アルハーン・アルアハマルの撤去を要求し、パレスチナ人は計画の停止を呼びかけた。
- ・入植者たちは、ジュレシ村の土地の前哨地を再建を企てた。
- ・入植者たちは、ジェリコの西の家を急襲した。
- ・ナビサレ村への占領軍の急襲で、呼吸困難者。

1月23日

- ・アルアクサでイスラエルの旗と公然とした集団的な礼拝
- ・元獄中者ユニス訪問したことで、逮捕された。二人のエルサレム青年が釈放された。
- ・ハマス：ハーン・アルアハマルの取り壊しは、民族浄化政策の1部である。
- ・ガザで、獄中者を支援する女性のデモ
- ・人民戦線は、アルハーン・ハマルへの襲撃取り壊しの隊は深刻な反動があることを警告。
- ・人権監視団：イスラエルの外国人の入国手続きは、パレスチナ人を孤立させるものである。
- ・占領軍は、シリワンの3人の少年を逮捕した。

1月24日

- ・占領軍は、解放された獄中者カリム・ユニスの兄弟の妻を逮捕した。
- ・アイルランドは、イスラエルに、欧州が基金を出した建物の破壊に対する補償を行うように要求
- ・アメリカとイスラエルの大規模な演習が開始された。
- ・米国防務長官がイスラエル訪問
- ・占領軍は、カラワト・バニ・ハッサンでブルドーザーを没収した。
- ・シリワン：アルブスタン地区の家の取り壊しの決定。
- ・占領軍は、ジェニンキャンプの青年を逮捕
- ・ベツレヘムの東のアルウバイディアの二軒の家を包囲した。
- ・ナブルスの南で入植者たちによって、何台もの車が攻撃された。

・アワルタで入植者たちの侵攻に威年たちが対峙した。

1月25日

- ・スールバヘル村の3人のエルサレム市民が逮捕された。
- ・分散した衝突、殉教者アルタミミの家の取り壊しが続いている。
- ・ノウル・シヤムスキャンプの襲撃で、市民が逮捕され、3人が負傷した。
- ・数十人の将校と諜報部隊が、アルアクサモスクを襲撃
- ・シュファットキャンプで、占領軍の銃撃で、重傷者
- ・占領軍は、殉教者アレフ・ラホロウの父親を逮捕。

1月26日

- ・シュファットキャンプの街頭で暴力的対峙
- ・ジェニンキャンプで、占領軍の銃弾で9人が殺された。
- ・シリワンのアイン・アルラザワ、衝突。
- ・シリワンで占領軍によって、2人の青年が負傷。
- ・元獄中者カリム、マヘル・ユニスの所有する50万シェケルと車を没収した。
- ・占領軍兵士がジェニン病院を催涙弾で攻撃。
- ・占領軍は、ガザからのロケットの警戒態勢を上げた。
- ・民族イニシアチブ、ジェニンでのファシスト犯罪は、パレスチナ民衆の抵抗を挫くことはできない。
- ・ジェニンの殉教者の遺体へ数万人が、追悼した。
- ・イスラエルは、レバノンとの国境にコンクリートのバリア建設
- ・大統領は、ジェニンの殉教者の魂のために3日間の喪に服することを発表
- ・アラブ連盟は、ジェニンの虐殺の責任は、占領当局にあると声明
- ・アルーハデールとベツレヘムの北の入り口での衝突
- ・占領軍：ジェニン作戦の標的はイスラム聖戦の細胞を標的としたもの。
- ・負傷した少年、アブラモズは、致命的な状態である。
- ・アルビレの北での衝突で、4人が銃弾で負傷、一人は重傷。
- ・東部ガザ国境で青年たちがタイヤを燃やした。
- ・占領軍は、入植者たちの行進を確保するためエルサレムを閉鎖
- ・アルラムの衝突で、市民が重傷を負った。

1月27日

- ・指導部：占領政府との治安共同は、もはや存在しない。
- ・イスラエル軍は、ガザ国境での警戒レベルをあげた。
- ・ネタニヤフ：われわれはエスカレートを意図していない。しかし、どのようなシナリオにもなっている。
- ・エルサレムの町や地区で衝突
- ・CIA長官がイスラエルとパレスチナ地域を訪問する。
- ・占領軍機がガザの拠点を爆撃
- ・最初の反撃—ガザの抵抗勢力、周辺入植地にミサイルを発射を開始した。
- ・金曜日安保理の緊急会議でジェニンの出来事について行われた。
- ・ヘブロンで占領軍の検問所に火炎瓶が投げられた。 Beit マールでは衝突が起こった。
- ・ツクの占領軍の対峙で呼吸困難者が
- ・ベイト・ウマールの衝突で呼吸困難者
- ・カフル・カッダムの行進の弾圧で、3人が占領軍の金属弾で負傷した。
- ・アルアクサで巡礼者を逮捕
- ・アルラムでの衝突で、負傷者。
- ・非常に多数の群衆がアルラムで殉教者ユセフ・ムヘイセンの遺

体を追悼した

- ・ベイトとベイトジャンの衝突で、呼吸困難者
- ・ガザでジェニンとの連帯の大規模な行進が行われた。
- ・ハーン・アルアハマルで市民が金曜礼拝を行った。
- ・マサフェール・ヤッタで占領軍は2つの居住部屋の建設停止通告
- ・ハーン・アルアハマルで無期限座り込みが宣言された。
- ・入植者たちが、マサフェール・ヤッタの市民の家々を攻撃した。
- ・サルフィットで入植者たちが市民を攻撃
- ・ベツレヘムの占領軍との衝突で呼吸困難者
- ・ナブルスの南で占領軍の銃弾で5人が負傷

1月28日

- ・ベイト・ウマールの衝突で負傷者
- ・エルサレム—殉教者アルカムの家族の15人以上の青年が逮捕
- ・ハマスは、エルサレム作戦を祝福。
- ・72時間の内に3人のエルサレム市民が殉教。
- ・占領軍は、エルサレム作戦の実行者の父親を喚問した。
- ・入植者たちは、イブラヒムモスクの近くで、子供たちを攻撃した。
- ・エルサレムで、殉教者の家族を含む50人が逮捕された。
- ・イスラエル警察は、8人の入植者を殺害したことに関連して、42人を逮捕したと発表。
- ・エルサレム作戦のあと、占領軍は警戒態勢を最高のレベルに
- ・シリワンの銃撃攻撃で、入植者たちが負傷。
- ・ナブルスの南で、入植者たちが市民の車を攻撃
- ・ジェリコの南で、銃撃作戦
- ・ネタニヤフに反対するデモが新たに行われた。
- ・アルエイザリヤで占領軍の銃弾で青年が負傷。
- ・入植者たちがナブルスの南で車を燃やした。
- ・ヤッファ、ジェニンにいたる侵略を抗議する行動
- ・アイダキャンプで、子供が占領軍の銃弾で負傷
- ・ナビサレ村で占領軍との衝突
- ・ジェニン近くで占領軍は青年を銃撃した。
- ・ナブルスの南で兵士をひき逃げの企て
- ・占領警察は、イスラエル人に武器を携帯するように呼びかけ
- ・入植者たちは、ヘブロンに銃撃
- ・ベツレヘムの西での占領軍との衝突で負傷者
- ・ベツレヘム南での入植者たちの攻撃で、2人の市民が負傷した。
- ・占領軍は、ジェリコの南のアカバト・ジャブルキャンプを急襲した。
- ・入植者たちは、請願のいくつかの道路と交差点で市民を攻撃
- ・入植者たちは、エルサレムの通りに分散し、散発的な衝突。
- ・ライオンズ・デンは、フワラキャンプと検問所への銃撃の責任を発表した。

1月29日

- ・カルキリヤの東で、作戦を行おうとしていたとして、占領軍は市民を撃ち殺した
- ・ジャバル・ムカベルの村でエルサレム市民の獄中者の家族の家を取り壊した。
- ・昨夜、144人の入植者たちが、ナブルスの南を攻撃した。
- ・シリワンの殉教者ハイリ・アルカムの家を封鎖した。
- ・占領軍は、ジェニンの2人の殉教者の父親を行政勾留にした

1月30日

- ・占領軍は、ガザ内にドローンが墜落したことを確認
- ・ベイト・ハニアで6人のエルサレム市民を逮捕。
- ・入植者たちは、西岸で、家を破壊し、パレスチナ人たちを攻撃



パレスチナ ガザ市 MC アブドゥル (ガザ出身の11歳の少年) 作
MC Abdul - Palestine [FREEVERSE] (エムシー・アブドゥル)

私たちの魂のために祈っています
私たちの家を食べ物にしている間に

歌手兼ラッパーは実はガザの11歳の少年で、その映像は印象的です。

この少年は、スライド式カメラでワンテイクで撮影した素晴らしいミュージックビデオを制作しています。しかし、背景には最近爆撃を受けた建物の瓦礫があり、作業員がまだそれを片付けているところです。

映像の冒頭では、倒壊した建物と並んで立っている建物が写っていますが、カメラがパンすると、立っている建物は見えなくなってしまう。もっと多くの瓦礫と破壊を見ることができます。もしかしたら、この若手ラッパーは、自分の住む街が徐々に破壊されていく様子を伝えるために、意図的にこのような演出をしたのかもしれない...あるいは、読みすぎだろうか？

いずれにせよ、MC Abdul は多くの人の心を打ちました。

パレスチナ・ガザ

何世紀もの間、私たちの家であった
この土地は、世代
家族の思い出をすべて

遊びながら成長し、育むために
平和の象徴
オリーブの木が、私たちの仲間が食べられることを保証
してくれたこと

制約のある中で生きる
占領に押し流される
痛みを見たいですか？
人々の顔を見てみよう
たった一軒の家を追い出されたことを想像してみてください。
さい。

これを言葉にするのは簡単ではありません
赤ちゃんの妹を見る
これは彼女にふさわしいことなのだろうか？
世界の中で成長する
同じように扱われないところ
自由に生きる権利を否定された
彼女が来たからこそ
この土地を占拠したい
私の心を占領させない。
私は、この側に留まっている
自分の人生について書きながら

なぜなら、私の役割は、人に聞かせること
シェイク・ジャラーに捧げる一枚
違いを生み出せることを願いながら
'48年に同じことが起こったから
私の祖父母は追い出された
そして強制的に退去させられる
ガザの難民キャンプへ
いいえ、何も変わりません
彼らは決して戻ることはできない
というわけで、今日はこんな感じです。

いどこから生死を問う電話がかかってくること
こちらは、空を照らす花火ではありません
イードで祝杯をあげようとする
そして、信念を貫く
思い出はこうして作られるということですね
ファラストイン

おいしいパレスチナ



マハラビア・アラビックスイート

私たちの地方ではマハラビアと呼ばれるミルクプリン。でも、私はこれを天国のようだと呼んでいます。私の友人たちは皆、このプリンが大好きです。

材料

- 3カップ 牛乳
- 砂糖 ¾ カップ
- 1カップ 冷水
- コーンスターチ 大さじ6
- ローズウォーター 大さじ1
- カルダモンポッド (丸ごと) 2個 (砕く)
- 1カップ 濃厚なクリーム
- 刻んだナッツ、お好みで

手順

1. 中火で、牛乳と砂糖を煮詰める。
2. 冷水にコーンスターチを混ぜ、沸騰した牛乳と合わせる。
3. ケーキ生地のようなとろみがついたら、火を止める。

その後、砕いたカルダモン入りのローズウォーターと生クリームを加える。

4. 4.2~4時間かけて冷ます。小皿に盛り付け、ナッツをのせる。

注：お好みでスキムミルクを使用してもよい。アラビア地方では、お米と一緒に使うところもあるようです。

守ろう！オリーブの木を カンパのお願い



オリーブ畑再生基金の目的

土地を守ることは抵抗闘争である。
パレスチナの農民の土地を守る闘い、
生活を守る闘いを支援します。
集まった基金は、パレスチナ農業
労働委員会連合 (UAWC) に送ります。

郵便振替

記号番号：00960-2-303500番
名称：オリーブの会 (オリーブノカイ)

他行等から振り込む場合

店名 (店番)：〇九九店 (099)
預金種目：当座
口座番号0303500



サウジアラビア外相がシリアを訪問



アブバース大統領は、サウジアラビアのサルマン王子と



エルサレムで、光のサバスのために聖墳墓協会に行こうとするキリスト教徒を制限しようとするイスラエル占領警察



東方教会のイースターの行進

今号の内容

過渡期にある中東情勢・・・・・・・・・・1
 政治的リアリズムのバランスにおけるサウジ・イ
 ラン合意・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
 ベン＝グヴィール軍団と今後のレジスタンス
 の対決・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
 イスラエルは民兵国家に変貌するのか?・・7
 パレスチナの決定的な日・・・・・・・・・・9
 フディ・ハダトを偲んで・・・・・・・・・・10
 パレスチナ日誌・・・・・・・・・・・・・・・・11
 パレスチナの愛した歌・・・・・・・・・・14
 おいしいパレスチナー・・・・・・・・・・15



ガザの土地の日の行進



ネタニヤフの司法改革への抗議行動が16週目に入った。